

尾道歴史クレーン保存・再生計画書

1996年12月18日

尾道観光市民会議

計画の目的

尾道最古の港湾クレーンを産業遺構として保存するとともに、まちづくりの風景要素として、更には新に尾道に加えられる観光資源として再生することを目的とします。

計画の主旨

産業遺構は、前期工業社会時代という「技術と人間の距離の近かった時代」の記憶として、今や忘れてはならない都市の記憶のオブジェとなっています。このクレーン保存・再生計画は、尾道の永い歴史のなかで、初期近代の記憶をとどめる存在として保存すると同時に、新しい都市装置として再生されることが、都市の豊かさをつくり上げるという考え方を実践するものです。

多様なものが混在して蓄積される記憶装置としての都市空間の独自性は、歴史を重ねた都市にしかできない豊かさです。この計画は、単にこのクレーンを物質として残す博物館的保存ではなく、可能な限り都市要素としての機能を持たせてゆくこと、しかも市民、企業、行政協働によって低コストで実現できることを提案するものです。

計画の説明

1. クレーンを彫刻と同列に都市のオブジェとして認識させるために、その基礎を黒く、オペレータールームを赤く塗ります。
2. オペレータールームは、基礎のモルタル部分を黒に塗り、台座とします。木造の主体構造を残し、それを赤く塗り、壁部分と屋根をガラスに置き換えて、中に照明機具を取り付けます。このことによって、この建物を都市の中の灯台のような存在として夜間光らせることにより、都市の中の詩的存在にします。この詩は産業のポエジーを目標とします。
3. オペレータールームの色彩は、産業の時代の芸術である構成主義にゆかりのある赤モチーフにします。この赤は錆び止めより少し明るい赤とします。
4. 公衆電話機は、最パソコンが接続できる先端のものを使用します。また電話台も、洗剤の容器など廃材を特殊技術（ロンドンにある会社の特許技術）で再生した最先端の建材で装飾した特注のもので、歴史的産業遺構と最先端技術の融合を図ります。
5. 施工は可能な限り、市民有志の手でおこないます。これは、尾道というまちの魅力である「手作りで少し不器用な」素晴らしいまちづくりの伝統を継承することを再認識するためでもあります。

計画の手法

この計画は、現存する産業遺構を再生して、魅力的な都市の要素として甦らせることを最も効果的にしかも経済的（第一弾の総予算100万円）に行うために市民参加、企業、行政ならびにアドバイザーの参加によって実現するものです。

具体的手法の説明

印象派の塗装

クレーン鉄部の塗装は、産業遺構の保存としてのみならず、この都市つまり尾道という街の芸術的文脈にそった塗装とします。経済的におこなうために市民有志の参加による塗装は、19世紀末から今世紀初頭にかけて成立した印象派の色彩と方法によって塗り直すこととします。

尾道は白樺派にゆかりの街であり、多くの画家の題材ともなっている街です。白樺派は印象派の紹介者であり、また尾道名誉市民の小林和作画伯の手法も印象派の流れを汲むものでした。印象派は、風景を題材とした初めての芸術運動であり、景観に恵まれたこの街には、ふさわしいものです。

このような意味からも、クレーンを印象派の画家の描いた手法の一つである点描法により、多くの市民の手で塗装することで、実物大の風景絵画的オブジェとして再生させます。このことにより、単なるクレーンは、彫刻的クレーンの絵画的オブジェとして観光都市尾道の新しい要素として生まれ変わるものです。

オペレータールームの電話ボックス「住吉浜公衆電話室」としての再生

産業遺構としての保存にとどまらず、NTTの協力を得て、都市の中で市民の日常生活のための「場」として利用されることで、このクレーンを都市の中の視覚的オブジェとしてだけでなく、現代の都市の要素として再生します。これは、市民や観光でこの街を訪れた人々に、この産業遺構を親しみのあるものに変容させることを目指しています。

電話という現代のコミュニケーション装置を古い産業遺構に組み込む試みは、先例がなく、極めてユニークなまちづくりであり、歴史遺産のない新しいまちでは、出来ないお洒落なまちづくりです。NTTという情報産業が、新しいまちづくりへの参加から、古い産業遺構を媒介とするまちづくりへの参加、古いものと新しいものとの結合による都市施設を可能とする新しい試みともなります。クレーン付きの電話ボックスは、尾道を訪れる観光客にとって、新しい名所になると確信しています。